

降倭「金忠善/沙也可」の表象と近代歴史学

—「売国奴」と「善隣」の隙間、そして「こころのオアシス」—

沈熙燦*

godokhae80@hotmail.com

あの家族と言えば、一腹で生れた犬の群れた。
——アルチュール・ランボー『地獄の一季節』

Contents

- 一. はじめに
- 二. 一九一〇年前後：朝鮮の植民地化
- 三. 一九三〇年代：帝国の拡張
- 四. 戦後：挫けられた「普遍」とその残映
- 五. 今日：資本主義と歴史表象

Abstract

本稿は、今日の日韓における「友好・善隣」のシンボルとして機能している「金忠善／沙也可」の歴史的な表象の作業を戦前に遡って検討することを目的とする。「金忠善／沙也可」は朝鮮が植民地となる一九一〇年代の段階では、ひたすら「売国奴」と評価され、かれの行跡が書かれているいくつかの史料もすべて偽作として批判された。だが、一九三三年に中村栄孝の論考が発表されると、「金忠善／沙也可」に対する認識は急転していくようになる。中村は、従来の研究に「実証性」が欠けていることを指摘し、「金忠善／沙也可」が歴史的に実在していたことを明らかにした。しかし、帝国日本の大陸への拡張の時期と重なっている中村の研究は、帝国主義の膨張の論理や普遍への欲望とも関わっていると思われる。「金忠善／沙也可」の表象に孕まれていた普遍への欲望は、戦後になると司馬遼太郎の再発見を経て、今日においては資本主義と結合され「こころのオアシス」という形で顕われている。本稿は、戦後に高く評価されてきた中村の「実証性」に基づく研究や、「友好・善隣」の象徴となっている「金忠善／沙也可」の歴史像を捉えなおし、「近代歴史学」そのものに含まれている暴力性をえぐりだそうとするものである。

* 立命館大学 文学研究科 博士後期課程。日本文部科学省学術振興会特別研究員DC1。韓日近代思想史。

Key Words : 金忠善、沙也可、表象、近代歴史学、中村栄孝、実証主義、普遍、廢墟
(Kim ChungSun, Sayaka, symbol, historical studieds of the mordern,
Nakamura Hidetaka, positivism, universality, ruin)

一.はじめに

金忠善／沙也可(一五七一?～一六四三?)は、文禄・慶長の役(一五九二年)のさい、朝鮮に投降した日本の武将である。普段から「礼儀之邦」を慕っていた沙也可は、加藤清正(一五六二～一六一一)の先鋒として朝鮮に渡ると、その「文物之彬彬 礼儀之煌煌 果是中華制度」であることを確認し、兵士三千人と共に慶尚兵使朴晉(?～一五九七)に帰順した。当時朴晉に送ったとされる「講話書」には、

僕島夷鄙人、海區庸夫也。(中略)而但聞海東有國、名曰朝鮮。朝鮮之爲國、一遵中夏之制度。衣冠文物、共三代而無異。禮樂刑政、效唐虞而淳彫。(中略)領兵三千及至本國、始見其民物、則雖兵火控惚之中、衣冠文物、果如平生所聞。信乎三代禮儀、盡在此矣、故用夏變夷之意。¹⁾

と、その降伏の理由として「中夏」への欽慕の情を取り上げている。

その後、朝鮮の側に立ち、日本との戦争や北方民族との紛争などで功績をあげたことや、鉄砲や火薬の製造法を朝鮮に伝えたことなどが認められ、金海金の名字や忠善の名前を朝鮮王(宣祖、一五五二～一六〇八)からもらうようになった。正憲大夫の官職についたかれは、朝鮮に定着し雅号を「慕夏堂」とし、現在の韓国の大邱市達城郡嘉昌面友鹿里に定住することとなる。

金忠善に関する最初の記録としては、一七九八年に金忠善の六代目の子孫、金漢祚が刊行した『慕夏堂年報』(以下『年報』と略す)がある。その後、一八四二年には同じく六代目となる金漢輔が、『年報』を改訂した『慕夏堂文集』(以下『文集』と略す)を刊行する。これらの書物は内容においてはほぼ同一であるが、編纂

1) 賜姓全海全氏宗会(一九九六)『慕夏堂文集附実記』、賜姓金海金氏宗会、p.三七。

の順次などに若干の差がある。この二冊は金忠善研究においてなによりも大事な史料であるといえる。また、金忠善家の族譜や儒者たちの上訴、関連記録を集めた『慕夏堂実記』(一九〇八年刊行、作者未詳、以下『実記』と略す)がある。なお、一九一五年には青柳鋼太郎(一八七七～一九三二)の主宰する『朝鮮研究会』が『古書珍書』刊行事業の一部として『慕夏堂集』(以下『集』と略す)を出版している²⁾。

金忠善に関する研究は、一九〇四年における幣原坦(一八七〇～一九五三)の論考をはじめとする³⁾。その後、青柳らによる研究がだされたが、今日の金忠善研究において第一の影響を及ぼしたといえるのが、中村栄孝(一九〇二～一九八四)の『慕夏堂金忠善に関する史料に就いて』⁴⁾である。戦後になると、金忠善は忘れられた人物となったが、司馬遼太郎(一九二三～一九九六)の紀行文が刊行されると、再び世間の注目を集めることになる。

紙面上、戦後の日韓における先行研究の紹介および内容分析は省略するが⁵⁾、ただ史料の制限にもかかわらず、実証的研究を通して不透明であった金忠善の存在を明らかにすることができたのは、大きな成果であったといわざるをえない。とりわけ、『朝鮮王朝実録』や『承政院日記』など、いくつかの史料に記された金忠善の記事と当時の状況などを考え合わせれば、金忠善が実在したことは疑いえない。なによりも、かれの子孫たちが韓国の大邱市にある友鹿里に共同体

2) これらの史料に関するさらに詳しい説明としては、韓文鐘『壬辰倭乱期の降倭将金忠善と『慕夏堂文集』』(『韓日関係史研究』二四集、二〇〇四年、ソウル)を参照。

3) 幣原坦『沙也可』、『歴史地理』第十卷第一号。

4) この論文は『青丘学叢』第一二号(一九三三年)に掲載され、その後一九四二年に『大邱府史』に載せられた。

5) 主に歴史学の分野で行われてきた関連研究を時代順に取り上げておこう。李丙燾『壬乱期の降倭金忠善』(『李忠武公三五〇周年記念論叢』ドンファサ、一九五〇年、ソウル)、北島万次(一九九五年)『豊臣秀吉の朝鮮侵略』(吉川弘文館)、仲尾宏(二〇〇〇年)『朝鮮通信使と壬辰倭乱』(明石書店)、丸山雍成『朝鮮降倭武将「沙也可」とはだれか』(広渡正利編『大蔵姓原田氏編年史料』所収、文献出版、二〇〇〇年)、崔ジャングン『近世日本朝鮮侵略領土拡張』(『朝鮮史研究』第一〇集、二〇〇一年、ソウル)、北島万次(二〇〇二年)『秀吉の朝鮮侵略』(山川出版社)、韓文鐘前掲『壬辰倭乱期の降倭将金忠善と『慕夏堂文集』』、貫井正之『沙也可時代から通信使時代へ』(『金忠善韓日国際シンポジウム』二〇〇七年、韓国)、山中靖城『文禄・慶長の役にみる日韓の視点と沙也可・金忠善』同上、金ソング『降倭沙也可の実存人物としての意味と評価』(『韓日語文論集』第一三集、二〇〇九年、ソウル)、朴ソンヒ(二〇一〇)『文学化された沙也可化に対する考察』(韓国高麗大学日本語教育専攻修士論文、ソウル)。

を作り、現在まで生活しつづけていることが、金忠善が実在していた史実をはっきりと物語っているといえる。

しかしながら、一九九七年に大阪で行われたシンポジウムのタイトルを、本稿では逆方向から読み返してみたい。つまり「再び今なぜ沙也可なのか」。文禄・慶長の役のさい、降伏した倭人、すなわち「降倭」は数多くあった。日本に連れられていった朝鮮人の数も多い。それなのに、なぜ金忠善にこれほどに関心が注がれるのか。

降倭の中には長陣による厭戦気分と兵糧不足から降倭になったものもいれば、はじめから秀吉の海外派兵に疑問をいただき、積極的に朝鮮側に投降したものもいた。後者の事例としては、倭乱勃発直後、加藤清正の先鋒将であった沙也可＝金忠善の場合が知られているが、この事例はきわめて稀である。⁶⁾

引用した文章から明らかになるように、金忠善が目される理由は、かれが「稀」な事例であるからだ。中華を慕い朝鮮に帰順したという、その「稀」なすがたは、以後「国境と人種を超越し、普遍価値に充実⁷⁾」した人物として評価され、「韓日両国の不幸な過去のなかで、日本人として生まれ、朝鮮人として生きていった沙也可を裏切り者でも、侵略者でもない、両国の友好・親善に貢献した日本出身の良心的な平和のメッセンジャー⁸⁾」として表象されていくようになる。

繰り返しになるが、今日においては、金忠善が歴史的に実在していたことについて異論を提唱する研究者はいないといっても差し支えないだろう。もちろん、かれの本当の投降の理由や時期などをめぐっては意見が統一されていないが⁹⁾、金忠善の実存は揺れ動かない事実であるといってもよいのだ。しかし、本稿では、金忠善の実存の問題をえぐりだしたり、ましてや投降におけるかれの本心を穿鑿することはしない。忘れてはならないのは、金忠善が実在していたことと、金忠善が表象されることとは、全く異なるレベルに属する問題である、というこ

6) 北島前掲『秀吉の朝鮮侵略』、p.六六。

7) 朴ソンヒ前掲『文学化された沙也化に対する考察』、p.五三。なお、韓国語の日本語訳は、すべて筆者によるもの。

8) 金ソンギ前掲『降倭沙也可の実存人物としての意味と評価』、p.一一五。

9) 崔ジャングン前掲『近世日本朝鮮侵略領土拡張』。

とだ。ここで問いたいのは、まさに「再び今なぜ沙也可なのか」ということや、そのような金忠善の表象化が、「朝鮮史編修会」¹⁰⁾の修史官であって、植民史学の主犯の一人として厳しく批判されてきた中村¹¹⁾の金忠善研究をイデオログとしていることの意味なのだ。この逆説から「近代歴史学」のある一面を浮き彫りにするのが本稿の目的である。

本稿では、「金忠善/沙也可」の表象の意味を分析するため、その表象が時代によってどのように変わってきたのかを主に四つの時期に分けて検討する。それは、単に「金忠善/沙也可」表象の歴史を辿るためではなく、むしろそれらの時期の間の横的關係や、重なり合いを浮き彫りにして、「金忠善/沙也可」の表象を貫いているものを摘出するためである。それにより、近代歴史学と実証主義の一断面が垣間見られることを期待している。

二. 一九一〇年前後：朝鮮の植民地化

冒頭で触れたように、金忠善に対する最初の研究ともいえる幣原の論考が『歴史地理』に乗せられたのは一九〇四年である。また、一九〇八年には作者未詳の『実記』が刊行され、七年後には「朝鮮研究会」が『集』を出版した。帝国日本の朝鮮植民地化の前後におけるこれらの金忠善論を先に紹介しておこう。

『実記』の序文には、日本が支配する陸地に住むなら海で住むのがよい¹²⁾、という思想をもっていた長齋田愚(一八四一～一九二二)の文章がある。田愚は金忠善を「豪傑之士」とであると賞賛しつつ、最後に以下のような言葉を記した。

噫此小華、滿地腥羶。九原可作、不辭執鞭。¹³⁾

「小中華」であった朝鮮が今は「満地」となり腐ってしまった、ということが書か

10) 「朝鮮史編修会」に関しては『季刊日本思想史』七六号(ベリ)かん社、二〇一〇年の諸論文参照。

11) 朴杰淳(二〇〇四年)『植民地時代の歴史学と歴史認識』景仁文化社、ソウル。

12) 田中隆二(一九九六)『兼山洪憲の生涯と活動』、『韓日関係史研究』第五集、p.一四六。

13) 前掲『慕夏堂文集附実記』、p.二三三。

れているが、一九〇五年の統監府設置など、帝国日本の朝鮮侵略が露骨になっていることを批判しているのである。田愚が『実記』の序文にこのようなことを書いた理由は明白であろう。「中華」を慕い朝鮮人となった金忠善のはなしに、現在の日本の朝鮮侵略を重ね合わせ批判しているのである。神功皇后の三韓征服、豊臣秀吉の朝鮮出兵の延長線上で当時の朝鮮侵略の正当化を謀った帝国日本にとって、朝鮮の文物を崇め、朝鮮人に帰化した日本人がいたということは都合の悪いことであった。日本が文明において朝鮮に劣っていたことは、少なくとも植民地支配の初期段階においては認めてはならないことであったのだ。金忠善に関する記録や史料らは、捏造、偽作として激しく批判されていくようになる。

幣原は「沙也可」と題した文章において、

先づ其氏名が日本人ではありません。(中略)釜山上陸後、直ちに戦意なきことを公言して、朝鮮の節度使と和を講ずるといふことは、日本の武士にあり得べからざること、殊に二十三歳の青年士官の挙動とは見えません。しかしそれは理屈だといふ人があるかも知れませんが、一たびその「暁諭書」及び「講和書」の本文を見れば、日本人のいひ得べきものでないことがわかるのであります。(中略)沙也可の文集を見ますに、尽く韓臭を帯びて、寸毫も日本人の文章らしくありません。尤文句は、当時の朝鮮人に添削させ、或は寧ろ之に書かせたといはゞいへない事もありませんけれども、其考が全く日本人と思へない所が多いのです。(中略)全篇尽く自卑の文で、いくら朝鮮をよく思つたからとて、日本の武士の口吻とは思へない所が多いのです。元龜天正の家庭にそだつた武士の面目が少しもなく、一種腐儒に類せる朝鮮の臭味が充ちて居るのであります。(中略)驍勇なる清正の先鋒に、初から戦意なき腰抜け武士を選抜したとは思はれません。¹⁴⁾

と述べ、金忠善の存在を完全に否定している。幣原の考証には、その正確さはさておいても、所々に「日本人らしくない」、「日本人とは思えない」、「日本の武士にはありえない」という表現が使われていることを見逃してはならない。おそらく幣原にとって、もっとも我慢できなかったのは、日本人が、それも「驍勇なる」武士が、朝鮮を慕い、ついには「腐儒」に感化したということであつたろう。幣原は

14) 幣原前掲「沙也可」、pp.三九-四〇。

一九二五年に『朝鮮史話』を執筆し、またも金忠善のことを論じているが、内容はほぼかわらず「怪しい点が多いから、結局慕夏堂の事蹟は、偽作と断じてよい」と結論づけている¹⁵⁾。

『集』は前述した通り、一九一五年に「朝鮮研究会」が『文集』の原文と日本語訳を共に編纂した書物であるが、多様な研究者の金忠善論が掲載されていて、また興味深い論考も少なくない。序文を書いたのは陸軍の軍人であり政治家であった立花小一郎(一八六一～一九二九)だったが、そのなかで立花は『文集』のことを「朝鮮儒生の卑屈にして曲筆舞文を事とすること実に此書の如し、其虚誕無稽彌縫の跡顯然覆ふ可からず、復何ぞ史界の評論を待たん哉。(中略)余は此の如き無徴の編著が従来朝鮮の社会に産出せざるべからざる理由を諸君と共に深く研究せんことを願ふものなり」と述べている¹⁶⁾。つづいて内藤湖南(一八六六～一九三四)は金忠善のことを以下のように断じている。

当時の日本人中退軍の際取残されし等の理由より彼地に残り降服致候ものは有之候事と存候もかの文集は全然仮託にて多分後人の手に成り候ものと確信致候(中略)常識より推し候ても当時の日本人にかくの如き文章出来可申筈は無(後略)¹⁷⁾

この二人のイントロには、『集』の編纂における意図が克明に現れているともいえるが、それは『文集』を偽作に断定した上で、それが書かれた理由を歴史的に明らかにすることであった。

編者の一人である山道襄一(一八八二～一九四一)は自ら友鹿里に訪れ、『文集』と板本とが相違していることを指摘し、金忠善が日本人であったことは否定しきれないといっても、「彼沙也可なるものが加藤清正の右先鋒将にして(中略)日本武士たりと云ふは決して信ずる能ざる所なり」と論ずる¹⁸⁾。『文集』と板本、それから村で手に入れた『文集』の原本を緻密に比較検討した山道は以下のような結論を下す。

15) 幣原(一九二五)『朝鮮史話』、p.三二〇。

16) 立花小一郎(一九一五)『慕夏堂序』『慕夏堂集』、朝鮮研究会、p.一。

17) 内藤湖南『慕夏堂史論』同上、p.五。

18) 山道襄一『慕夏堂金忠善』同上、p.二〇。

之を要するに慕夏堂文集なるものは我軍中の卑賤なる雜卒が捕虜と為り命乞ひを為したるか又は和寇の徒と鮮人との混血児の偽日本人か其孰れかが自家擁護の為め如斯記録を仮草したるか或はまた朝鮮南部儒生等が民心鼓吹の必要上故らに朝鮮謳歌の為め作製したるものなるかの二者其一に過ぎざる(後略)¹⁹⁾

と述べ、最後には

一種の半島民の自負心に基ける時代的脚本なりと見ば敢て妨げ無からむか、而も之れに依て豊公の征韓役が如何に朝鮮上下を攪乱したるか、如何に彼等をして日本を恐怖せしめたるか、又斯かる滑稽的人物を画いて世道人心の救済に苦心せざる可らざる迄に当時の朝鮮社会が腐敗墮落し居たるか、又如何に朝鮮人の頭脳が粗大散漫たるか等は此一記録に依り遺憾なく表示せられ居れりと云ふを得むか。²⁰⁾

と結ばれている。山道の論調はきわめて重要な示唆を与えている。それはただ単に朝鮮蔑視観や日本の優越が現れているだけではなく、そこまで辿り着く過程が「実証」を通して、ということだ。むしろ、ここにおける「実証」そのものは方法的にも、まだ認識的にも洗練していたとはいえない。しかしながら、本稿で問題とするのは、その正当性を問うことではなく、当時の植民地主義の展開において「実証主義」を核とする「近代歴史学」が横たわっていたことである。

然るに今日尚如此偽書を信じ沙也可の如き売国奴の同胞中にありしことを信ずるものあるは遺憾の極なりと云うべし。²¹⁾

『集』の結論ともいえるこの引用文において、「滑稽的人物」として描かれていた金忠善はついに「売国奴」となっている。金忠善に対するこのような厳しい評価を考察するためには、当該期の日本の歴史学の状況を考慮しなければならない。当時の歴史学者たちに与えられていた課題は「日本民族」の始原を明らかにし、そ

19) 同上、p.三八。

20) 同上、p.四〇。

21) 河合弘民『偽書慕夏堂文集』同上、p.六〇。

の変遷の過程を追うことであった。「日本民族」の歴史を明らかにしようとした代表的な研究としては、津田左右吉(一八七三～一九六一)や喜田貞吉(一八七一～一九三九)の作業などがあげられるが、かれらの研究の特徴は「日本民族」の一体性を強調したり、あるいは周辺の諸民族の歴史をその一体性の中に包含させようとするににあったともいえる²²⁾。

このような歴史への眼差しは、主に日本の古代に向けられる場合が多かったが、植民地朝鮮の歴史研究にも大きな影響を及ぼしていた。たとえば、東京帝国大学で朝鮮史を専門としてはじめて博士号をとった人物である今西龍は、朝鮮民族が北方の民族とは無縁であって、日本と深い関係を有すると主張し、高句麗・中国に対して新羅・百済・日本が一つの圏域を形成して抵抗していたと論じたことがあるが、これらの研究には日本民族の内側に朝鮮民族を入れこもうとする意向が帯びられていたのであろう²³⁾。

上述した歴史学界の動向は、「実証主義」の名を掲げて行われた金忠善像の創出にも多大なる影響を与えたのである。併合のイデオロギーにおいて、自らが日本民族であることを放棄するような行為は許されなかった。だが、植民支配が深化していくと、表象化の作業もその性格を異にしていくようになる。

三. 一九三〇年代：帝国の拡張

一九〇二年、現在の千葉県で生まれた中村栄孝は、二三年に東京帝国大学国史学科に入学し、二六年には朝鮮総督府の修史官となって、以後の朝鮮史編修会の作業に深く携わっていくこととなる。朝鮮のことに興味をもっていた大学時代のかれは、黒板勝美(一八七四～一九四六)が朝鮮歴史の編纂事業に関係していることを聞き、黒板を訪ねる。そこで中村は朝鮮に渡って『李朝実録』を読むこ

22) 田中聡『転機としての『日本歴史教程』—早川二郎のアジアの共同体論』、磯前順一、ハリー・ハルトゥーニアン編(二〇〇八)『マルクス主義という経験—1930—40年代日本の歴史学』所収、青木書店。

23) 今西竜の朝鮮史研究に関しては、拙稿『実証される植民地、蚕食する帝国—今西竜の朝鮮史研究とその軌み』(前掲『季刊日本思想史』七六号所収)を参照されたい。

とを勧められるが、それがかれにおける本格的な朝鮮史研究のはじまりであった²⁴⁾。

『李朝実録』を自由に読むことができた中村は、日鮮関係史に関する研究を目指していたこともあって、おもに文禄・慶長の役にかかわる記事を中心として読んでいたのではないかと思われる。そのなか、かれは金忠善の記事が実録に載せられていることを発見するが、それによって既存の金忠善研究の論駁ができるようになった。

従来の論断は、概して慕夏堂集の信ずべからざることを証し、且つ信憑すべき史料に沙也可又は金忠善・慕夏堂などの名が見えないのを理由とし、当時の日本武将として有り得べからざることゝいふ観念を基礎として、金忠善沙也可の事蹟と称するものを疑ひ、従つてこの人物の存在を否定するに至るのを通例としてゐる。果たしてその全部が無条件に受け容れられ得る結論であらうか。いま本稿に於いては、管見に触れた一二の史料を紹介して、この疑問に答へる資としたいと思ふ。²⁵⁾

ここに述べられている「一二の史料」は、『李朝実録』と『承政院日記』、そして友鹿里で手に入れた自筆の「婚書」のことであるが、まず『承政院日記』には以下のような記録がある。

御營廳啓曰、山行砲手十七名、降倭子枝二十五名、自陣上率來、竝置本廳之意、曾已啓下矣。其將降倭領將金忠善稱名者、爲人不特膽勇超人、性亦恭謹、故适變時、逃命降倭追捕一事、其時本道監司、皆委於此人、不勞而能除之、誠爲可嘉。聞其所言、其子枝中可用而落漏者亦多、若有朝廷別抄作隊之事、則渠當招集、聞變上來云。此輩之今番從軍者、依前例、爲先復戶一結、自中子枝之落漏者、亦令本道查出、成冊上送、所持鳥銃環刀、以本道軍器所上中、擇好分給、常行操鍊、有變卽爲上送之意、本道監兵使處、一體知委、何如、答曰、依啓。²⁶⁾

24) 中村の生涯および業績に関しては、中村栄孝「朝鮮史と私」(『日本歴史』四〇〇号、一九八一年)、「中村栄孝先生追悼記事」(『朝鮮学報』第一二集、一九八四年)を参照。

25) 中村前掲「慕夏堂金忠善に関する史料に就いて」、p.一六七。

26) 『承政院日記』仁祖六年(一六二八年)四月二三日。

中村はこの記事をもって、金忠善という人物が実際に存在していただけではなく、「降倭領将金忠善といふ者があつて、人となりたゞに膽勇人に超えてゐたばかりではなく、性亦た恭謹であつた」とその品性を褒め称え、また「李适の変や丁卯・丙子の役に降倭が従軍して活動したことは、今日の朝鮮史としては最早常識に属するが、その領将の中に金忠善といふ勇士がゐたことは、この唯一の記事によつて知り得るのである」と朝鮮における金忠善の活躍をも史実として捉えている²⁷⁾。

また、従来の研究においては金忠善が「正憲大夫」という官職についたことに対して、「余りにも官階高きに失するの觀があつたが」、「婚書」の内容や日時、署名などをみると、「金忠善が正憲まで昇つたのは疑ひない事実であることを証明することが出来」と強調した。この論理は「婚書」が「官文書ではなくて、全くの私的文書、而もそれは後世に於いて格別利害を伴はない性質のものであつて、「偽作の必要のないものに違ひないから、最も確実な史料と認めて宜し」という史料としての性質に基づいていた。もちろん、中村は「婚書」を手に入れるまで助力してくれた人々への感謝の意を表すことも忘れてはいない。これらの史料を用いることで中村は、「年譜亦たその総べてを小説的文学と捨て去ることが、果たして妥当といへようか」と、先行研究を「実証」的に批判することができたのである²⁸⁾。

中村の立論の過程にもう少し深く入ってみよう。既存の研究において争点になっていたことの一つは、李适の乱(一六二四年)で金忠善があげたという大きな功績が、『文集』のみに記されていて他の記録には表れていないということであった。しかし、それらに関する記事が『承政院日記』からみられるし、その『承政院日記』は信頼すべきであることが明確に証明されている。

なお、金應瑞(一五六四～一六二四)の指揮に従い日本軍と戦つたということも否定されてきたが、『李朝実録』に当時従軍していた降倭のなかに沙也加の名があることを確認し、それが沙也可と同一人物に間違いないと主張する。つまり、『李朝実録』宣祖三〇年の記事に、

27) 中村前掲「慕夏堂金忠善に関する史料に就いて」、p.一六九。

28) 同上、pp.一七二―一七三。

天兵斬二級、儉僉知沙古汝武斬二級。訓練副正李雲、降倭同知要叱其、僉知沙也加、降倭念之、各斬一級。倭旗紅白黑白大小旗三面、槍一柄、劍十五柄、鳥銃二柄、牛四首、馬一匹、我國被擄人百餘名奪來。且出身楊淵、乃平安道三和之人也。²⁹⁾

と書かれていることを、中村はだれよりも早くみつけたのであった。さらに中村は、金忠善の子孫である金漢祚が漢陽の金應瑞の子孫の自宅を訪れ、そこで偶然金忠善の史籍が目に触れられて『文集』が刊行できたという、先行研究で怪しすぎると批判されてきたことをも、充分ありうることだと擁護している。

以上、中村の金忠善論を簡略にみてきたが、ここで注意を払わなければならないことは、中村の金忠善論における狙いは既存の研究の限界、つまり実証性の足りなさを指摘することにあつたことである。このような中村の先行研究への態度は九〇年代半ば以降の金忠善研究において「客観的な研究であつて、(中略)『文集』が偽作であり、金忠善は売国奴であつたという認識を払拭させることに大きく寄与した³⁰⁾」ものとして賞賛され、数少ない「良心的な日本の知識人」の一人に中村も含まれるようになった。今日における「友好・善隣」の象徴としての金忠善像が形成されることにおいて、その根拠を提供してくれたのが、中村による実証的な研究であつたのだ。

たしかに、中村の金忠善論は以前の研究に比べると、実証性が強化されているし、それは金忠善に関して、史料が語ってくれること以外にはなんらかの価値判断もしない中村の姿勢からもわかる。金忠善の物語が植民地支配と積極的に結びつけられた既存の研究とは全く異なっていて、中村は金忠善の投降の背景や、儒学の影響、あるいはその歴史的な意味に関しては、一言も触れていない。さらにいうなら、中村は金忠善が日本のどこの地域の人であつて、なぜ朝鮮に投降して日本と戦つたのか、あるいは本当に儒学的な素養を帯びていたのかなどの以前の研究で活発に議論されていたことにはなんの興味もないのである。中村はただ、史料に書かれているもののみをもって、それを考察するのであつて、

29) 『朝鮮王朝実録』宣祖三〇年(一五九七年)十一月二日。

30) 漢文鐘前掲『壬辰倭乱期の降倭将金忠善と『慕夏堂文集』』、pp.七一一七二。

史料からわかることのできない事項に関しては一切言及しない。「朝鮮史編修会」が刊行した『朝鮮史』の中で、中村は自分が担当していた第四編の朝鮮時代に金忠善の名前をそのまま載せているが、それは客観性の極限に至っている自らの歴史認識を示すためでもあったと思われる³¹⁾。

もちろん本稿は、たとえば幣原のような研究を、植民地支配初期におけるとてつもない植民史学として批判し、逆に中村の研究をその高い実証度に基づいて評価することをもくろんでいるわけではない。本稿が狙上にあげようとするのは、かくのごとき歴史学者の実証主義的な歴史研究が、別言すれば「純粹」な学問を装っている歴史学が、実は当該期のコンテクストに強く縛られているということである。中村は一九三三年に書いた「慕夏堂金忠善に関する史料に就いて」を四二年にもう一度掲載しているが、その時期の中村の他の文章に少し触れてみよう。

一九三八年に「内鮮一体論」という題で行われた講演会で中村は「我が國の歴史を辿つて見ますと、八紘一字の大理想に向かつて、皇道を宣布するといふことが、肇國の大精神である」と述べ、「併合の事實は、(中略)この日本の進むべき八紘一字を理想として皇道宣布するといふ精神の發展の結果として現はれた、一つの重大なる事實なのである」と天皇制イデオロギーと歴史学、朝鮮の併合を連動させながら説明を試みている³²⁾。

日中戦争の勃発や、帝国日本の大陸への侵略は新たなイデオロギーを必要としたし、それは「東亞新秩序、延いては世界新秩序の建設³³⁾」という壮大なナラティブとして顕われた。そのため、中村における国史教育の目的は「国体の尊嚴たる所以を体認するといふこと」であって、それはまた「皇國ノ歴史的使命ヲ自覺セシム」ことでもあった。また「国史は国体の精華を皇國發展の跡に即して闡明するといふ所に独立の立場がある」のであったのだ³⁴⁾。

歴史の目的が天皇制イデオロギーの具現のなかで価値を有するという中村の

31) 『朝鮮史』と歴史学の客観性、そしてそれらの暴力性に関しては、拙稿前掲「実証される植民地、蚕食する帝國」を参照されたい。

32) 中村(一九三八)「内鮮一体論」『朝鮮の教育研究』、p.三七。

33) 中村(一九四一)「新初等教育の展開に際して」『朝鮮の教育研究』、p.四。

34) 中村(一九四一)「国民学校国民科教則案について」『文教の朝鮮』、p.一―二。

議論は、当時の日朝の知識人によくみられる主張でもあった。差別を隠しつつ、「同化・融和」というスローガンの下で進められていた歴史認識形成の過程は、宗主国と植民地の間で多種多様な分節を孕んでいくようになる。だが、少なくとも「金忠善／沙也可」の研究において分節はみられず、中村の寛大な研究による「同化・融和」の契機だけが確認される。帝国の人々が植民地にあこがれていたといっても何の問題にもならない時期がきたのではなかろうか。

「日本民族」の一体性を主張した津田左右吉の著作が一九四〇年に禁書となったことは周知の通りである。「日本民族」の枠のみでは説明ができない、というより説明してはならなくなったのであるかも知れない。宗主国の人と植民地の人が結合して、その「子孫も亦た最も廣く繁衍し」ているということは、偽作・捏造として表象されるどころか、「事実そのもの」を含んでいるものとなっていたのだ³⁵⁾。

こうしてみると、「国境と人種を超越」する「普遍性」の根源としての金忠善像は、中村の研究に端を発しているが、その中村の議論が帝国主義の拡張の論理としての暴力的な「普遍性」に担保されていたことがわかってくるだろう。もし、実証主義的な姿勢を貫いていた中村が、帝国主義のイデオロギーに汚染されてしまったと解釈するのであれば、それは、全く転倒された理解であるといわざるをえない。なぜなら、実証的な研究を行いつづけていた中村が、帝国主義のイデオロギーに染められてしまったのではなく、むしろそれらの実証的な研究が帝国主義の唱える「普遍性」を準備し、連動しつつ発達したとみるべきであるからだ。「実証主義」と「帝国主義／普遍性」は矛盾するどころか、互いをつねにすでに目標としているのである。

史料に対する物神主義的な思考、フェティシズムは、中村の金忠善研究の核心に据えられていたものであったが、同時に帝国主義における普遍への欲望とも絡んでいたのである。史料に対する中村の執着は他の文章からも確認できるが、とりあえず「慕夏堂金忠善に関する史料に就いて」の最後には、友鹿里を訪問したさいに、非常に楽しみにしていた史料が子孫たちの不用意で廃棄されてしまっ

35) 中村前掲「慕夏堂金忠善に関する史料に就いて」、p.一七七。

たということへの嘆息がもらされている。「貴重な文献遺物を佚した例が多いのは遺憾この上もなく、識者の注意を喚起し、何等かの施設が望ましいことである。³⁶⁾」

中村の願いはおよそ七〇年経ってから叶われた。というのも、大邱市が友鹿里に歴史博物館を作り、そこで金忠善関係資料を保管するようになったからである。だが、中村の願いが実現されるためには、もう一つの重要な契機が必要であった。それは司馬遼太郎の紀行文から確認することができる。この契機は金忠善像が植民地で分節されず、中村の眼差しのみが残されてしまったこととも関係しているが、現在においてもなお深刻な問題を産み出している。まずは、司馬の旅を追っていこう。

四. 戦後：挫けられた「普遍」とその残映

戦後の日韓において、金忠善に光が当てられはじめたのは、司馬が韓国を回り、その感想を紀行文としてまとめたからである。戦前において、兵隊として植民地朝鮮に渡ったこともある司馬は、一九七一年、大韓民国に旅行するため旅行会社に訪れる。そこで日本語がとてもうまく、背も高いし、頭がよくて仕事も手際よくこなす、しかもまるで「伽倻山の露からうまれたようなきれいな肌をもつ」韓国の女性、ミス・チャと出会う。

ミス・チャに対して奇妙なコンプレックスを感じる司馬は、「どういう目的で韓国にいらっしゃるんですか」と彼女に質問されると、「日本とか朝鮮とかいった国名もなにもないほど古いころに、朝鮮地域の人間も日本地域の人間もたがいにつだったとそこは思っていたでしょうね、(中略)そういう大昔の気分を、韓国の農村などに行って、もし味わえればとおもって行くんです」と答えた。朝鮮に対する自分の深い思いを彼女はどのように受け止めるだろう、とある意味興味津々でもあった司馬であろうが、ミス・チャの答えは司馬の頭の中を真っ白にならしめた。

36) 同上、p.一七八。

つまりゴウヘイしようとおっしゃるんですか³⁷⁾

きれいでやさしい韓国人の女性とどう接したらいいのかがわからずいらだっていた司馬は、自分の発言が戦前の日鮮同祖論と同様なものであったことに気づく。司馬は雰囲気をかえるため、冗談口をたたこうとするが、あわてて「あんなウルサイ民族と二度とゴウヘイしたいという日本人はいないでしょう」と「ヘタな冗談をいってしま」う。ところで、「ミス・チャは怒らず、逆に晴れやかな笑顔になり、司馬はやっと落ち着くようになる。韓国人との対話の難しさから、帝国日本の植民地朝鮮支配を思い起こした司馬は、以下のような言葉を吐く。

私が朝鮮人なら死を賭してでも独立運動をやると思い、そう思った自分にはげしい感動を覚えたことがある。³⁸⁾

司馬のナルシズムを、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」、あるいはジャン＝フランソワ・リオタールの述べる知識人の「遂行性」にすぎないと批判するのはたやすい作業であろう³⁹⁾。が、本稿で注目したいのは、韓国人との触れ合いのむずかしさからくる迷いが、司馬のなかで和解されるつぎの場面である。すなわち、優秀なるミス・チャすらその存在をしらなかつた「友鹿里」に訪問したのである。

友鹿里にいく車のなかで、金忠善のことをずっと考える司馬は、到着するまえに、金忠善は実在はしていたろうが、かれが残したという文集はどうも「あやしい」という結論に至る。なるほど、歴史小説家であった司馬は、日朝の関係、時代的状况などを考慮しつつ、しかも戦前の日本の歴史学者たちの考察をも参照しながら、一番合理的な結論を導き出したのだ⁴⁰⁾。ところが、友鹿里に到着し村を歩き回ることにつれて、司馬の内面には注目すべき変化が起こる。もう少し

37) 司馬遼太郎(一九七八)『街道をゆく2 韓のくに紀行』朝日文庫、pp.九一―一三。

38) 同上、p.一三。

39) エドワード・サイード(一九七八)『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社。ジャン＝フランソワ・リオタール(一九八四)『知識人の終焉』原田佳彦、清水正訳、法政大学出版局。

40) 司馬前掲『韓のくに紀行』、pp.一五七―一六五頁。

司馬の旅行につきあってみよう。

今は道路が整備されていて、友鹿里に行くことは困難ではないが、当時の司馬は結構苦勞しながら村に着いたらしい。日本人の子孫たちが住んでいる村に日本人がやってきたことに涙まで流した、ソウルの梨花女子大学出身のガイドのミセス・イムに若干の違和感を感じる司馬は、あまりにも「日本人くさい」村の構造に驚く。村の風景や、人々の行動および特徴の全てを李氏朝鮮と対比しながら観察する司馬は、村の広場に足を運び、そこである老翁と出会う。「儒礼による白い冠をいただき」、白衣を着ていて、「灰色のひげが顔をおおって」いる老翁のすがたは、司馬をして「白髪白装の神」もしくは中国の「読書人、村夫子、老儒生」が蘇ってきたような気分させた。「正直なところ、二十世紀半ばのこの世の地球にこういう人物がなお生き残っているということに一驚した」。老翁の威厳と風貌に圧倒された司馬をさらに驚かせたのは、以下のようなガイドと老翁の対話であった⁴¹⁾。

彼女は(中略)この村がかつての日本武士の村であるというので、このイルボン・サラムたちはやってきたのだ、という意味のことをいった。それに対し、老翁ははじめて口をひらいた。低い声であった。「それはまちがっている」と、老翁はゆったりとした朝鮮語でいうのである。それはというのは、そういう関心の持ち方は--という意味であった。「こっちからも日本へ行っているだろう。日本からもこっちへ来ている。べつに興味をもつべきではない」と、にべもなくいったのである。⁴²⁾

日本人の子孫と日本人の感激的な再会を演出したがったミセス・イムは、老翁の淡々な反応に落胆したかもしれないが、司馬は「声をあげて笑ってしま⁴³⁾」うしかなかった。司馬は、日本人として韓国を回りたいのではなく、日本と韓国の間境界線がなかった「大昔の気分」を感じることに、いい換えれば韓国人と人間として出会いたかったものの、韓国人という他者からくる葛藤と躊躇をも感じていたが、老翁との出会いは司馬の感受性の居場所を提供するようになった。

41) 同上、pp.一八八—一九〇。

42) 同上、p.一九〇。

43) 同上、p.一九一。

司馬の韓国人への態度は、金忠善のことを近代的な合理性の世界から問うていたように、戸惑いを伴うものであった。そこには、植民支配や戦争といった帝国の負の側面が含まれざるをえないがゆえに、司馬は迷ったり、葛藤したりしていた。ところが、金忠善の實在は司馬における帝国主義的な感受性を安らげてくれたのである。金忠善が儒教を理解していたはずがない、という司馬の疑問はきれいに晴れた。

沙也可が儒教の国を慕って化したのは賢明であったかもしれない。かれはいまなお、かれの子孫という四千人から、儒礼をもって斎かれているのである。(中略)沙也可の異議をゆるさぬ實在が、胸にせまってくるような思いがした。⁴⁴⁾

いつの間にか、金忠善は司馬の内面で「儒教を尊んだ倭人」というイメージに転回していったのである。金忠善像の意味が戦前の植民地朝鮮で分節されることなく、もしくは「横領」されることもなく、「同化・融和」の逸話にとどまってしまうという事態が、戦後韓国に訪れた司馬に心地よい場所を与えたのだ。挫折された帝国主義の「普遍」の欲望は、旧植民地の小さな村である友鹿里にそのかすかな影を垂れていたのである。

五. 今日：資本主義と歴史表象

司馬によって再発見された金忠善が世にしらせるまでには、まだ二〇年ほど時間が必要であった。それは、資本主義が拡張していくことに必要な時間でもあった。一九九二年、日本のNHK放送局は「出兵に大儀なし——豊臣秀吉を裏切った男、沙也可」というドキュメンタリーを放映した。文禄・慶長の役四百周年を迎えて企画されたこの番組は日韓の学者たちに大きな反響を呼び起こした。「金忠善研究会」などの学術研究団体が組織され、シンポジウムが開き、また数多くの研究論文が出された。小説やマンガが出版され、演劇も上演された。司馬の

44) 同上, p.一九三。

訪問のさい、直接はなしを交わしたこともある金在徳(金忠善の子孫)は、金忠善関連の書籍を刊行しはじめた。金忠善は新たな「友好・善隣」のシンボルとして注目を集めたのである。

大邱市は友鹿里を「韓日友好村」として立てなおす計画を公表し、歴史博物館を建設した。愛知県新城市、滋賀県近江八幡市などの朝鮮との縁がある地域では、「沙也可の会」が結成され、実教出版社が刊行した高校日本史Aには沙也可の記事が載せられるようになった。二〇〇八年には友鹿里に「韓日友好館」設立が決定され、着工を記念する行事が行われた。これらの諸事業をサポートしたのは、地域の政治家や、新聞社および銀行であった。このようにして、かつての『文集』は「どこへとりに行ったわけでもなく、チマ・チョゴリのなかからでも取りだすようなすばやさで私どもに示してくれた」り、「あとでわかったことだが、この『慕夏堂文集』の古版は、おばあさんの家だけではなく、この村の何軒もが保存してい」たものであったのが⁴⁵⁾、今は嚴重に保管され、だれもがもっているどころか、一般には公開することすらできない奥深いところに閉じこまれるようになった。それは史料の価値をさらに高くすることでもある⁴⁶⁾。

二〇〇四年、大邱市は「韓日関係の新しい地平——友鹿里、金忠善」というタイトルのシンポジウムを開催し、「韓日友好村」建設における方向を、政治家、観光事業専門家、文化人類学者、歴史学者、弁護士、地域の官僚などを呼び集めて議論した。シンポジウムではなされた内容を簡単にまとめると、友鹿里の道路を整備し、駐車場や食堂、宿泊施設などのインフラを整え、観光客を誘致すること。キャンプ場を立てて日本の学生たちの修学旅行コースとして開発すること。友鹿里をブランド化し、韓服・キムチなどの商品を販売すること。花道を作り、日本人をしてこころの故郷に帰ってきたような感情を誘発することなど、様々な提案が出されている。このような諸計画のモデルとなったのは、宮崎県の南郷村、岐阜県の白川などであって、いわば日韓の「友好・親善」を掲げた観光地を作るのが「韓日友好村」建設の目的であった。

45) 司馬前掲『韓のくに紀行』、pp.一八二—一八三。

46) このような「史料のポリティクス」については、前掲『季刊日本思想史』七六号の長論文参照。

『韓日友好村』は、金忠善とかれの子孫たちが構築した友鹿里の歴史・文化、そして住民たちの生のすがたを総体的に表現し、また観光客誘致という戦略的な思考をその基盤としなければならない。(中略)家屋としては韓国の草屋や瓦葺きの家、日本のすすきの屋根、武士の家屋などを共に建築すべきである。訪問者にこころのオアシスが提供しうするためには、一本の木、一株の草に至る村全体が一つの舞台にならなければならない。⁴⁷⁾

かつて『外界から人が訪ねてくるようなことはまれ⁴⁸⁾』であった友鹿里は、年間一千人ほどの日本人観光客を誘致するところとなった。「一夜でもこの里ですごしたりすると、生涯わすれられない」ほど美しく、「星が里を覆っている」友鹿里であったが⁴⁹⁾、現在には町並みに食堂やモーターが並んでいる。

このような金忠善の商品化が、九〇年代半ば以降の日韓文化交流といった資本主義の拡大と密接に絡んでいることはいうに及ばない。市場経済の論理とその発達は、とりわけ植民地支配の経験の有していた日韓の間では、無数の『ミセス・イム』を作り出す必要があった。換言すれば、互いの市場を拡張することにおいて『友好・善隣』の歴史を強調することは、とても有用な戦略になりえたのである。ミセス・イムが企んだ企画は、二十年が経ってからこそ、とりもなおさず資本主義が膨張しはじめる時代になってからこそ、強烈に働きはじめたのである。その原動力となったのが、司馬の感じたノスタルジアの感情であることはいうまでもない。

今日の日韓の間では、ホミ・バーバの言葉を借りていえば『ひとたび劇場で映画の上映がはじまったら、あるいはテレビやパソコンのスイッチが入ったら、あなたは『グローバル状況』として知られるテクノロジーの『関係性』の網目のなかに組みこまれてしまう⁵⁰⁾』ような世界が構築されている。日本のアニメ、映画、音楽、ファッションなどが韓国で同時期にはやり、また日本で『韓流ブーム⁵¹⁾』が起

47) 『嶺南日報』二〇〇四年二月九日の記事から抜粋。

48) 司馬前掲『韓のくに紀行』、p.一八一。

49) 同上、p.一八四。

50) ホミ・バーバ、(二〇〇九)『ナラティヴの権利——戸惑いの生へ向けて』、磯前順一、ダニエル・ガリモア訳、みすず書房、p.五。

51) 『韓流ブーム』に内包されている『文化的記憶の歴史性』に関する考察としては、岩根卓史、二〇〇五年『『韓流』で〈朝鮮〉は死んだのか—中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌』を読んで』、『日本思想史

こっていることは、両国間に「グローバル・マーケット」がすでに形成されていることを如実に物語っている。

だが、本稿はそれが不純なる市場経済の論理に基づいていると難詰しようとするものではない。問題は、金忠善に関する文化表象と歴史学的な作業を促している資本主義の論理が、軍事的な侵略、物理的な領土占領などを伴わない「〈新〉植民地主義」あるいは「植民地なき植民地主義」に裏づけられていることだ⁵²⁾。金忠善という「友好・善隣」の物語は、急速なる市場経済発達の産物であるが、その「〈新〉植民地主義」を理論的に支えたのが、近代学術知であって、そのなかでも歴史学が果たした役割は大きかったといわざるをえない。

旧植民地の人々は旧宗主国の人々に自らところを休ませる場所を提供し、また旧宗主国の人々は旧植民地からくる戸惑いや葛藤を避けるための「ところのオアシス」を探してくる。このようなポストコロニアリズム的なメカニズムの背後には、資本主義のグローバルなる膨張というコンテクストが隠されているが、それらの連結の装置として「実証主義」を最良の価値とする「近代歴史学」があるのではなかろうか。

友人菊池長風君曾て嶺南に入るの時鹿村の住民君の文名を聞き代表者を以て君に会談を請ひ、君の筆に依りて慕夏堂を日本に紹介し併せて数百年來可憐なる鹿村民の在ることを寺内総督に伝達せられんことを懇請したる由なるが君は慰諭して戯れて曰く「君等の祖先は日本に反逆せし国賊也其国賊の子孫今嶺南に蕃殖せることを総督に報告したりとて君等に於て何の利益もなからん」と(後略)⁵³⁾

この引用文は一九一五年に書かれた内藤の文章であるが、ここからは当時における友鹿里住民たちの生のナラティブと、それをあまりにも軽く受け止めている知識人の姿を垣間見ることができる。住民たちの生のナラティブもまた、各時代のコンテクストによって絶えずにかわってきたことが容易に推測できるだろう。しかし、「金忠善/沙也可」に関する戦前から今日までの研究において、この

研究会会報』二三号)を参照。

52) 西川長夫、(二〇〇六)『〈新〉植民地主義論』、平凡社。

53) 内藤湖南「序に代へて諸家に致せし書簡を録す」前掲『慕夏堂集』、p.三。

ような生のナラティブというのが真剣に問われたことがあるだろうか。

「近代歴史学」はあらゆるところにおいて「実証主義」の手法を用いながら、他者の存在を歪める「普遍的」な「こころのオアシス」を構築しているが、「普遍」はそもそも「こころのオアシス」にあるのではなく、むしろ「廃墟」にのみ存在するのであって⁵⁴⁾、そこでしか他者とのつながりや共同性を築き上げることができないのである。「廃墟」で生きる思考、すなわち「こころのオアシス」を「廃墟」に置き換えるという、歴史学に与えられたこの新しい課題は、もうすでにわれわれの目の前に迫っている。本稿はその一環として「金忠善/沙也可」の歴史的な表象を「廃墟」に送り返そうとしたのである。

참고문헌

- 金ソンギ(2009) 『降倭沙也可の実存人物としての意味と評価』『韓日語文論集』第一三集、ソウル。
 金漢輔(1842) 『慕夏堂文集』。
 金漢祚(1789) 『慕夏堂年報』。
 朴杰淳(2004) 『植民地時代の歴史学と歴史認識』景仁文化社、ソウル。
 朴ソンヒ(2010) 『文学化された沙也化に対する考察』韓国高麗大学日本語教育専攻修士論文、ソウル。
 賜姓金海金氏宗会(1996) 『慕夏堂文集附実記』。
 『承政院日記』
 李丙燾(1950) 『壬乱期の降倭金忠善』『李忠武公三五〇周年記念論叢』ドンファサ、ソウル。
 作者未詳(1908) 『慕夏堂実記』。
 『朝鮮王朝実録』
 崔ジャングン(2001) 『近世日本朝鮮侵略領土拡張』『朝鮮史研究』第一〇集、ソウル。
 韓文鐘(2004) 『壬辰倭乱期の降倭将金忠善と『慕夏堂文集』』『韓日関係史研究』二四集、ソウル。
 貫井正之(2007) 『沙也可時代から通信使時代へ』『金忠善韓日国際シンポジウム』、ソウル。
 岩根卓史(2005) 『「韓流」で〈朝鮮〉は死んだのか—中根隆行『〈朝鮮〉表象の文化誌』を読んで』『日本思想史研究会会報』二三号。
 エドワード・サイド(1986) 『オリエンタリズム』(一九七八)今沢紀子訳、平凡社。
 北島万次(1995) 『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館。

54) 「普遍性」と「廃墟」に関しては、ジュディス・バトラー、エルネスト・ラクラウ、スラヴォイ・ジジェク編、(二〇〇二) 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』(二〇〇〇、竹村和子・村山敏勝訳、青土社)の中、とりわけラクラウの文章を参照されたい。

- _____ (2002) 『秀吉の朝鮮侵略』山川出版社。
- 幣原坦(1904) 『沙也可』『歴史地理』第十卷第一号。
- _____ (1925) 『朝鮮史話』。
- 沈熙燦(2010) 『実証される植民地、蚕食する帝国--今西竜の朝鮮史研究とその軌み』『季刊日本思想史』七六号、ペリかん社。
- 司馬遼太郎(2008) 『街道をゆく2 韓のくに紀行』(一九七八)朝日文庫。
- ジャン=フランソワ・リオタール(1988) 『知識人の終焉』(一九八四)原田佳彦、清水正訳、法政大学出版局。
- ジュディス・バトラー、エルネスト・ラク라우、スラヴォイ・ジジェク編(2002) 『偶発性・ヘゲモニー・普遍性』竹村和子・村山敏勝訳、青土社。
- 田中聡(2008) 『転機としての『日本歴史教程』--早川二郎のアジアの共同体論』磯前順一、ハリー・ハルトゥーニアン編『マルクス主義という経験--1930-40年代日本の歴史学』所収、青木書店。
- 田中隆二(1996) 『兼山洪憲の生涯と活動』『韓日関係史研究』第五集。
- 朝鮮研究会(1915) 『慕夏堂集』。
- 仲尾宏(2000) 『朝鮮通信使と壬辰倭乱』明石書店。
- 中村栄孝(1933) 『慕夏堂金忠善に関する史料に就いて』『青丘学叢』第一二号(一九四二年『大邱府史』に再録)。
- _____ (1938) 『内鮮一体論』『朝鮮の教育研究』。
- _____ (1941) 『新初等教育の展開に際して』『朝鮮の教育研究』。
- _____ (1941) 『国民学校国民科教則案について』『文教の朝鮮』。
- _____ (1981) 『朝鮮史と私』『日本歴史』四〇〇号。
- _____ (1984) 『中村栄孝先生追悼記事』『朝鮮学報』第一一二集。
- 西川長夫(2006) 『〈新〉植民地主義論』平凡社。
- 丸山雍成(2000) 『朝鮮降倭武将「沙也可」とはだれか』広渡正利編『大蔵姓原田氏編年史料』所収、文献出版。
- 山中靖城(2007) 『文禄・慶長の役にみる日韓の視点と沙也可・金忠善』『金忠善韓国国際シンポジウム』、ソウル。
- ホミ・バーバ(2009) 『ナラティヴの権利--戸惑いの生へ向けて』磯前順一、ダニエル・ガリモア訳、みすず書房。

❖ 투고일 : 2010.12.31

❖ 심사일 : 2010.01.31

❖ 심사완료일 : 2011.07.28